

令和4年1月21日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 李 竺楠

学位論文題目

謝罪言語行動に関する日中対照研究 —インターアクションの視点からの考察—
(A comparative study of apology in Japanese and Chinese : Consideration
from the perspective of interaction)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

異なる言語文化間では、言語行動のあり方に違いが見られる。これまでの言語行動研究では、褒め、依頼、などとともに謝罪のあり方もその対象とされてきた。本論文では、日本と中国の謝罪行動の異なりを、発話行為を超えた談話レベルで捉えた実証的な分析を行い、対人的要素や言語の運用面への配慮をさらに強化させたインターアクションの視点を導入することで新たな分析枠組みを求めることを目的とした。

2. 本論文の構成

本論文は、言語行動としての謝罪の対照研究の必要性を論じた「はじめに」に始まり、第1章で謝罪研究の概観と本論文の謝罪研究としての位置づけの確認を行ったのち、当該言語行動遂行の目的、当該言語行動を誘発する状況、当該言語行動の遂行の方略、当該言語行動の談話構成という課題に答える議論の道筋を提示する。第2章では、先行研究の批判的検討を通して、最初の課題である謝罪の目的の明確化と以下の章で議論すべき論点を整理する。これらの議論をもとに、つづく第3～5章では、謝罪を誘発する不快状況、送り手の謝罪方略と受け手の応答方略について、談話資料に基づく実証的分析の結果が示され

る。第6章では、それまでの議論の結果を受けて、謝罪談話の検討に必要な構成上の特性を指摘し、それを盛り込んだ言語行動の対照言語学的分析の枠組みを提示する。結語の「おわりに」では、本論文の意義と課題が示される。

まず「はじめに」で論者は、謝罪をめぐる言語文化間の異なりは、多くは印象レベルで語られているだけであり、異文化間の相互理解を促進するには、言語行動として謝罪を対照的に研究する必要があることを論じている。

第1章の「序章」では、論者はこれまでの謝罪研究の動向を概観し、本論文が「謝罪言語行動の個別性に関する対照研究」であること、そのために熊取谷(1993)が提示した言語行動の対照分析の4つの課題をインターアクションの視点から捉える必要があることを主張する。

第2章の「各課題に関わる先行研究の批判的検討」では、論者は言語行動の対照研究の4つの課題に関わる先行研究を批判的に検討し、課題1「謝罪の目的」が人間関係の修復であることと捉え、および具体的な分析対象である謝罪を誘発する状況とその方略について、それぞれの分類基準と下位分類を明確にし、以降の章で行う分析の理論的基盤を準備する。加えて、本論文のデータ収集と分析の方法を示す。

第3章では、課題2「謝罪の遂行を誘発する状況」の考察を行う。論者は日中の「職場ドラマ」「ホームドラマ」「医療ドラマ」という場面の異なる謝罪談話を、人間関係(「親疎」と「上下」)と不快状況の種類および深刻度の点から対照分析を行う。その結果、謝罪が生じる頻度や不快状況の種類は日本ドラマのほうが多いこと、日本ドラマには「軽度」の、中国ドラマには「中度」の不快状況で謝罪が多く見られることを述べている。

第4章と第5章では、課題3の送り手と受け手が「謝罪行動の遂行に使用する方略」についての分析である。第2章の「謝罪方略」および「応答方略」の分類をもとに、「家庭場面」と「医療場面」において、送り手の謝罪方略(第4章)と受け手の応答方略(第5章)が親疎と上下の人間関係と不快状況の深刻度によってどのように異なるかを、論者は方略の「種類」「使用のあり方」「組み合わせ」の3つの側面から検討する。その結果、深刻度が上がれば使用する方略の数が増えること、関係修復のプロセスにおける方略の優先順位が日中で異なる可能性があること、などの点を示す。

第6章では、これまで論じた課題1~3への答えを整理したうえで、残された課題4「当該言語行動の談話はどのように構成されるか」について、熊取谷(1993:37)の談話プロセスの基本構造と日中ドラマの謝罪談話の具体例を用いながら、送り手と受け手の双方の方略が「柔軟性」「主導性」「連動性」という3つの相互行為的特性とどのように関連するかを論じている。さらにその結果をもとに、日中の謝罪に関する印象が異なる理由を、先行研究の謝罪が遂行される過程のモデルに依拠して検討を行い、最後に場や文脈、人間関係等を取り込んだインターアクションの視点を組み込んで、熊取谷(1993)を発展させた対照研究の枠組みが提示される。

「おわりに」では、本論文の意義とこれからの課題が述べられる。インターアクションの視点の導入による熊取谷(1993)の理論的な補足と談話用例の分析に基づく実証的結果

から言語行動の対照分析の枠組みに新たな展開を示したことが本研究の重要な意義であること、この枠組みが謝罪以外の言語行動全般に有効であるかどうかの検証は今後の課題であることを述べて、論者は議論を終える。

3. 本論文の評価

1) 評価されるべき点

まず第一に、謝罪という普遍的な言語行動において異文化間で理解困難な事態が生じる問題をより包括的に捉えるために、分析の単位を発話レベルから談話レベルへと広げて検討したことが挙げられる。そのために、先行研究の批判を通して理論的な基盤を整えたいうえて、謝罪が生じる状況や方略の点から談話用例の整理を行い、送り手だけでなく受け手の行動にも焦点をあてるという分析の方向性を示したことは評価できる。

第二に、先行研究では議論が十分ではなかった謝罪行動の談話プロセスは、柔軟性、主導性、連動性という談話構成を支える3つの相互行為の特性を背景として、目的達成のために謝罪参与者たちの方略が選ばれ、その具現化としての発話やターンの連鎖で談話が構成されていくということを指摘したこと、加えて言語行動の対照分析の枠組みに対人的要素や言語の運用面への配慮をさらに強化させたインターアクションの視点を導入する必要があることを主張したことなどは、一般には単なる印象レベルで語られている言語文化間の類似と異同を言語行動のレベルで捉えて比較する対照研究に非常に重要な知見を示したと言える。

2) 問題点

談話を捉える相互行為的視点として、謝罪が生じる状況と人間関係による枠組みを決めて分析を進めたのは良いが、枠組みにこだわりすぎて結果的に分析の方向性をしばってしまった点、日中の全体的な傾向の異なりを示すために談話例の分類に関する議論が増えてしまい、個別の事例でどのような謝罪行動が進行したのかについての考察が不足していた点などの問題が見られた。

また言語行動を捉えるには当該の行動が生じた場合だけでなく生じなかった場合も考察の対象とされるべきであるが、謝罪が生じた談話をおもな分析対象としているため、謝罪談話の実践の全体像と異文化による差異の検証として不完全に終わっている感も否めない。

さらに具体例に基づく論述がやや不足していることや、異文化間の差異を捉える謝罪モデルの理論化の議論が先行研究を越えたレベルに達していないなどの点も指摘された。

4. 総合評価

本論文には、上記のようないくつかの問題があるものの、先行研究の議論を慎重に整理して言語行動を談話レベルで捉える方法に新しい基準を示したこと、ドラマからの用例とは言え、過去の発話行為論のように研究者が作ったものではなく、実際に使用された用例

をもとに議論を行ったこと、談話実践の背景となる状況や話者間の人間関係を取り込んだ分析を試みたこと、また先行研究で残されたままになっていた談話構成に関わる相互行為上の特性を指摘して対照研究の新たな枠組みを提示したことなど一定の成果を上げている。そのため、審査委員は全員一致して博士（学術）の学位を授与するに値すると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合

審査委員

主査

太田一郎

副査

丹羽謙治

副査

尾崎存忠

副査

高木千恵